

第3段となる「後継者プロジェクト」では、まだ承継に至らない世代に承継を準備している仲間たちのリアルな声をお届けしようという企画である。

今回取材させて頂いたのは、関西統括和歌山本部の小畑康平さんと息子である智哉さん。SPCには息子さんとバトンタッチで組織から身を退いた康平さんだが、和歌山本部の立ち上げに尽力した組織の重鎮だ。

関西統括本部長からのご推薦もあり取材を依頼したところ、康平さんは何と現在肺癌を患っており、治療しても1年持つかどうかと余命宣告を受けている身であった。このコロナ禍の中、東京から越境して取材なんでもつてのほかに、康平さんが断るのもごもっともである。しかし、智哉さんは「今だからこそ」という気持ちもあり、悩み抜いた結果、安全には満を持して取材を決行した。それも、抗がん剤治療開始の前日であった。

取材当日にお叱りを受けたのは言うまでもない。

「こんな時期に地域に責任ある経営者が東京から取材陣を呼び込むなんて、これでは息子に本当の意味で『承継できた』などとはとても言えない」とキレおつしやられた。

そんな状況の中でも小畑家の「SPCと承継」について貴重なお話をさせて頂いたので、ここにまとめたいと思う。

康平さんは、父平(たいら)さんが創業した「タイラン」という理容室を継ぐ2代目だった。他所では修行をせず、父のもとですつと店を温めてきた。康平さんは昔から父の背中を見て「家業を企業にしたい」という想いがずっとあったという。店主が体調を崩したり怪我をしたら、店が回らなくなるからだ。

また20歳そこその頃に、日中国交回復を目的とした「青年の船」というものに乗込み、上海・北京・天津などを回った事があるそうだが、その時「散髪屋といたら、エッチな話かパチンコの話ばかりだよな」と言われた。それがきっかけで「業界のイメージを変えたい!」という想いが心に芽生えたそうだ。

国家資格のある「師」のつく職業なのに、サラリーマンの方が年収も地位も上なんて、こんな事が許されるのか!周りに「何だ、散髪屋かよ」「パーマ屋かよ」と評価が低い事に怒りを覚え、

### 理念の原点



Kohei-Kobata

「理美容業の社会的地位の向上」「理美容師の生活や人間性の向上」をしていかなければと、21歳の時に自分の理念として明確に紙に記したのだという。

その後も、保健所から70年も昔に作られた理容師法を持ち出して「あれはダメ」「これはダメ」と言われた時には「行くところまで行つてやる!」と大喧嘩をしたこともあり、「これは業界の根本を正さねば!!」とさらに想いを強めていった。

それが現在のタイランホールディングスの理念に直結していると共に、理美容師法に「資質の向上」という文言を追記するよう改正を求めてきた故・横山室長率いるSPCとの繋がりを強調したのには間違いない。

### SPCとの出逢い

若い頃から美容組合に加入し、様々なお役も頂いてきた康平さんだが、技術の講習はたくさんあっても理美容経営の講習は皆無に等しい時代に、和歌山で行われるSPCの経営セミナーの葉書が無い込んで来たそう。

それまで美容組合一本でやってきたが、周りは意識が高いわけでもなく、彼は葉書を見て「こ

れだ!!」と直感し、仲間と数人で受講しに向いたそう。

入会金30万円と聞いた時には「騙されるのでは」と怪しんだが、その後も追っかけのようにSPCのセミナーに出向き、数々のメーカーの協賛を受けて開催されている競技会も見て、これはまともな組織だ!と確信し、42歳の時にメディアモードに入会した。

SPCは当時、美容組合から「変な宗教団体」といわれるほど嫌われていたため、美容組合の支部長を務めていた彼にとってSPC入会は大変風あたりのキツイもので、大勢の組合員が自宅に列をなして抗議に来たほどだったという。

しかし彼はSPCで様々なことを学びながら、本店の理容室とは別に50歳の頃にユニセックサロンの展開し、その後の10年ほどで3店舗を多店舗展開し、福祉美容事業も始めた。

55歳になるまでなかなか職人気質が抜けず、技術者としてスターの座を譲らなかつたという康平さんだが、SPCの仲間たちからは「アクセルとブレーキを同時に踏んでいる」とたびたび助言され、ようやく自分の心に描く組織を作り始めることができたのだという。

当時の事を振り返り「SPCの門を叩いて本当に良かった」と語る康平さん。石橋を叩きながらも着実に、自分の理念に沿ってここまで歩んできた。



## 企業の未来を考える 後継者プロジェクト Case.3 TAIRAN Holdings



# バトンタッチ

康平さんは3人の男のお子さんに恵まれ、3年前に三男である智哉さんがタイランホールディングスの社長を引き継いだのだそうが、その承継の裏側にはSPCが深く関わっていた。

智哉さんは幼少の頃から経営者になる事に興味があったそうで、父に言われるでもなく自社に美容師として務め始め、今から12年前、父と入れ替わる形でSPCに入会した。

社長である父を長年2番手として支え続けてきた智哉さん。トップを支える事を自分の得意分野とし、それを活かしてこれまでSPCでも副部長や副部長の役職を全うしてきた。

しかしSPCはそもそも経営者集団であり、トップが集う会だ。組織に身を置くうちに「いつまでも2番手で良いはずがない」という想いが生まれ、本部長を担う時には「長の勉強をさせて頂くのだから、絶対自社でも長

でなければダメだ！」と強く感じ、根気強く社長交代を願い出した結果、ようやく社長になれたのだそうだ。

「自分の中では組織事と自社事がすごくリンクしていて、本部長をやらせて頂いた時に自社でも社長になり、これまでセカンドとして誰かを補佐してきたことを、今度は自分がリーダーとなつて物事を決めたり旗振りをしたりするようになり、最初は迷いもありましたが、最近やっとなつてきました。」

「父の創った理念の1番の語り部だったので！」と智哉さんは語る。事業継承にはまだ早いと思っていた康平さんも、智哉さんの熱意に負けて社長の座を譲ることにしたそうだが、これまでも長年に渡つて智哉さんには想いや理念を伝え続けてきた為、社長交代しても根っこはブレないという確信があっただろう。

「好きなようにやったらいい」と、ただただ見守っている。「社長とは孤独だが、仲間がちゃんと見ていてくれる。だから私は全然心配していません。」

レがしたいという人たちのニーズを叶えるべく、どこにでも出張してパーマやカラーも施術し、サロンと単価を頂いていきます。売上より人件費の方が上回つてしまつて現状赤字の事業なのですが、地域に根付いて信頼を勝ち取り、ゆつくりと地道に広がっています。今後は益々需要が高まると思いますし、自社スタッフ

ステージとしても考えているので、赤字でもこの事業は継続させていきます。いつも目先の売上ではなく、将来に投資できるワクワクする新しいことを考えています。もちろん足元は固めて、土台づくりは堅実に！父の背中を見てきたからこそできるスタイルです。そしていずれは和歌山でナンバーワンの企業にしたい！」

そんな新社長を康平さんは、「好きなようにやったらいい」と、ただただ見守っている。「社長とは孤独だが、仲間がちゃんと見ていてくれる。だから私は全然心配していません。」

康平さんは何故、息子と交代してSPCを退会したのか。康平さんにとってSPCとはどんなものなのだろうか？今の想いを伺つてみた。

SPCではよく『組織事』と『自社事』と言いますよね。51(組織)・49(自社)の法則なるものを耳にした事があるかもしれませんが、自ずと自社も広がるという教えです。しかし私はこれについては『違つ』と感じて来ました。まずは100を自社事にし、足元が安定してから組織事(他者貢献)であるべきなのではないかと、それで潰れてしまった人もたくさん見て来たから、あえて伝えたいのです。

自社や家族を差し置いて、慈善事業の神輿を担いでも、それは元来の経営者の姿では無いと思います。まずはしっかりと足元、土台を固めることに尽力して下さい。それができなければ、地球環境保全にも、地球生命の安寧にも、到底届かないのです。そして願わくば、今後は益々『資質の向上』が重要になって来ますので、理美容師法の改正は是非とも成し遂げて頂きたいと思えます！」



Tomoya-Kobata

# 企業の進化

智哉さんは自社の展望についてこう語る。

「自社の仕組みを整理しながら店舗の増築も行ったのですが、フロントの横にフリースペースを作つて『美容師塾』を始めました。自社の美容師が講師となつて地元の小・中学生、高校生たちに技術を教えています。自分も技術ができなくて怒られたりしながら仕事をした経験がありますし、終業後のレッスンを負担となつてスタッフが退職してしまつたこともあつて、もっと早いうち

から技術に触れて即戦力を身につけてあげられる環境はないものかと考えたからです。さらに、子供たちに美容師という仕事に興味を持ってもらつて体験させてあげて、楽しんで貰えたら、現在の業界の課題でもある美容師のなり手不足の解消に少しでもお役に立てるのではないかと思っています。商売としたら大赤字の事業なんですけど、これは父のDNAでしょう。父が始めた福祉美容も、低料金でたくさんの人をカットするのはなく、歳をとつてもオンシャ

# SPCへの想い

「SPCは皆ルーズだったり、上から目線だったり、非常識だったり、嫌いなところがいっぱいあります(笑)。私はあまり人の言う事も聞かないし、品が無いのが嫌であり飲み会にも出なかつたので、SPCではアウトローだったかもしれせん。でも、掲げている理念は大好きです。自分の信念に共通したものを感じて来ました。」

私は視野を広げるために、今は中小企業家同友会に所属し、世の中のことを広く学べる環境に身を置いています。SPCは美容業界のことをとにかく深掘りする組織です。狭く、深く、掻き巻く。若手経営者にとつてはとても良い環境だと思えます。若手会員に伝えたいことが1つあります。



# 「ルーツ」と「思い」、 そして「DNA」。



今回、コロナ禍の中でお邪魔させて頂いた小畑さんの地元であったが、智哉さんがまず最初に案内してくれたのは祖父が開業した理容室「タイラン」、初代本店の跡地であった。

その店は川縁に建っていて、店を閉めた後も事務所として長く使っていた為、今も内装はそのままに残されていた。

「今となつては、完全に違法建築ですよ〜」と笑いながら案内する智哉さん。当時は最新式であっただろう、オシャレな収納式のシャンプー台が重厚感を増して佇んでいた。幼少の頃はよく店の裏手の川で遊んでいたそう、3代続いたルーツを肌で感じる。

祖父は職人、父は経営者を夢見た職人、そして彼は地元ナンバーワン企業を目指す経営者へと、家業から企業へ、脈々とそのタスキが繋がれている。

「僕は早く家族経営を抜け出したくて、今後は経理も社員にやってもらいたいし、僕の後継者も息子に限らず社員でも良いと考えています。」

さらには、雇用するスタッフ

フも理美容師に限らず、理美容師以外が行う業務も増やしていきたいと考えています。

美容を文化として地元に影響させたい。そして理美容の縛りなく、サロンの可能性を広げたい！」

智哉さんはタイランホールディングスの未来をこう語った。

承継を終え、やり方を変える事で先代とぶつかる企業も多々あるだろう。しかし、毛穴から染み付いたルーツと想い、そしてDNAがある限り、在り方はきっとブレない。そして経営者の「孤独」を補うSPCという温もりのある土壌が、各社の永続を助けていくだろう。



## 株式会社タイランホールディングス

和歌山県有田郡有田川町下津野1118-8

TEL 0737-52-2717

H.P. <https://tairan.info>

